

蘭

学の勃興は『解体新書』(二七七四)に始まる。その翻訳は対訳辞書も文法書もない時代に、前野良沢が長崎で阿蘭陀通詞から学んだ語彙と翻訳法を駆使して、蘭学仲間と共同討議した成果だった。その翻訳法とは、既知の語彙をオランダ語写本に書き入れ、漢文訓読式に読み下す方法であった。蘭学勃興後の最初の画期は日本最初の蘭和辞典『波留麻和解』(二七九六)の出版である。大槻玄沢の門人、稲村三伯(海上随鷗、二七五八〜一八二〇)が元阿蘭陀通詞の石井庄助、蘭学者の桂川甫周、宇田川玄真らの協力を得て、フランス語で印刷し、訳語を書き入れ、わずか三〇部を蘭学仲間頒布した。次の画期は元阿蘭陀通詞馬場佐十郎の幕府天文台訳官着任(一八〇八)であった。佐十郎は師中野柳圃(志筑忠雄、一七六〇〜一八〇六)の開拓したオランダ語文法研究の成果を宇田川玄真ら江戸の蘭学者にもたらした。

京都の蘭学者藤林普山(泰助、一七八一〜一八三六)は蘭和辞典『訳鍵』(二八二〇)と『和蘭語法解』(二八二五)の出版によって、江戸蘭学の成果を継承発展させた。両書は開国(一八五四)直後の蘭学ブーム到来まで、蘭学の普及に大いに貢献した。『訳鍵』は海上随鷗と名を変え、京都で開塾した稲村三伯に入門した普山が、師の『波留麻和解』を訂正簡約したものである。見出し語(三〇〇〇語という)、訳語とも木活字で、一〇〇部の限定出版であったが、需要に応えて一八二四年に二〇〇部再版された。

商館長ドゥーフが幕命によって阿蘭陀通詞と協力し、ハルマ『蘭仏辞典』を翻訳した蘭和辞典『ドゥーフ・ハルマ』(二八六〇〜一八三四)は『訳鍵』に比して、訳語が詳細正確で例文も多かったが、幕府編纂物であり大部であったため、『和蘭字彙』(二八五五〜五八)と改題して出版されるまで、流通が極めて限られた。

『和蘭語法解』は数種の原書をもとに、例文と文法表を用いて、初めて体系的にオランダ語文法を記述している。馬場佐十郎はオランダ語序文で藤林普山を師中野柳圃の門流に位置づけ、この画期的文法書は蘭学生松明であると激賞した。その逐語訳を下に示す。

序

阿蘭陀語の書を読まん欲する者に、その文法に通ずることの如何に不可欠たるかは、よく人の理解する所なり。この実地の知識を以て始めて、書物、即ち内科外科の書を有益かつ有利に読解しうるのみならず、また此に依り病人を正しく治療し、また無論、誤り無く我が母国語に翻訳するを可能ならしむ。現今出版されたる多くの訳篇は実に誤りに満ちり。ひとえにこの文法の無知によるものなり。従って、上記の医書を読み、その成果を摘み取り、また、その翻訳を以て他者にその益を播種せんとするならば、最善は、まず第一にこの文法を学ぶことなり。

およそ二〇〇年以前、日本人は阿蘭陀文字を書くことを禁ぜられ、阿蘭陀語を口頭にて学びたり。故に進歩は不可能なり。然れどもその学習を許されてより、時によりて著しき進歩あり。他方、言語の正則及び正用法を未だ十分に知らざれば、作文にても翻訳にても誤用しざらばなり。しかるに、我等が名高き師、中野柳圃によりて文化元年、文法の醍醐味の発見されしより、ここかしこを覆いたりし暗雲は消え去りぬ。是を以て人は彼を常に尊敬すべし。

彼は甚だしく蒲柳なり。然れども好学の素質ありて、常に鼻先を書物中に入れたり。しかも遂には、我等に実なる恩恵を及ぼしたり。しかし、我等が不幸なることに、その三年後、文化四年、四七歳にして、長崎に没したり。

柳圃の門流中、主たる者は三人のみ。即ち、吉雄六次郎(権之助)、西吉右衛門、及び下記署名の者なり。第一の者は今、同じく長崎にあり。第二の者は既に死せり。第三の者はその後、江府に召されたり。上記の柳圃の学理は、この最後の者によりて初めて、江戸の同学に伝えられたり。就中、宇田川(玄真)、藤井(方亭)はその主たる者にして、最初にこれをよく習得したり。

都に住する藤林泰助は我等が門流の一人なり。実に好学の素質に富み、上述したる同じき観点より、勤勉努力して文法書を翻訳せり。以下爰に見らるる如し。この著作はと言え、学生にとりての松明なりと言ふべし。文化二年八月二五日誌す。

於江戸 馬佐十郎

言葉を学ぶ

藤林普山と蘭学の普及

松田清

